

角山遺跡 山居遺跡

——三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書VI——

平成18年3月

宮城県教育委員会
国土交通省東北地方整備局

宮城県文化財調査報告書第206集

角山遺跡
山居遺跡

—三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書VI—

序 文

宮城県北東部を縦貫する三陸縦貫自動車道は、現在河北インターチェンジまでの区間が開通し、さらに北に向かって工事が進められています。

この三陸縦貫自動車道建設用地内には、先人が残した貴重な文化財が埋蔵されている遺跡があります。埋蔵文化財は、わたしたちの郷土の歴史と文化を根底から支える歴史遺産のひとつであると同時に、将来における文化向上の礎の一部をなすものです。宮城県教育委員会では、これらの遺跡を保護するために、関係機関と協議を積み重ね、路線の一部変更も含め、万全を期してまいりました。

本報告書は、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所との保存協議に基づき、三陸縦貫自動車道の建設に先立って実施した桃生郡桃生町（現石巻市）山居遺跡、角山遺跡に関する発掘調査報告書です。双方の遺跡の調査を通して、この地域の歴史を解明していく上でも貴重な成果を得ることができました。今後、この報告書を多くの方々に活用していただければ幸いに存じます。

最後に、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際して多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成18年3月

宮城県教育委員会

教育長 白 石 晃

例　　言

1. 本書は、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所との協議に基づき実施した、三陸縦貫自動車道建設に伴う山居遺跡・角山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 発掘調査および資料整理・報告書の作成に際しては、以下の方々および機関からご指導・ご助言、ご協力を賜った（所属機関名は当時の名称・敬称略）。

小野岩男 石巻市桃生町公民館 十貫東部落会 石巻市教育委員会 東北歴史博物館

4. 本書の第II図は国土交通省国土地理院発行の「飯野川」「涌谷」「登米」「西野」（1/25,000）の地形図を複製して使用した。
5. 測量原点の座標値は、日本測地系（改正前）に基づく平面直角座標第X系による。なお、方位は座標北を表している。
6. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

S I : 壑穴住居跡 S X : 壑穴遺構・焼土遺構その他 S B : 挖立柱建物跡

S A : 柱列 S D : 溝跡

P : 住居内のピット K : 住居内の土壤 D : 住居内の溝・間仕切り

7. 本書で使用した遺構番号は、角山遺跡は調査・整理時の際に付した通し番号（01～03）を平成15年度調査においてⅢ区の遺構に付された遺構番号1012に統けて記した。例えば調査・整理時のS I 01は本書ではS I 1013となる。

山居遺跡は遺構の種別に関わらず、調査の際に付した通し番号を用いている。

8. 遺構平面図にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構全体図：1/400 壑穴住居跡：1/60 挖立柱建物跡：1/60

9. 土色の記載にあたっては、『新版 標準土色帖 1994年度版』（小山・竹原 1994）を使用した。

10. 本文中に使用した「灰白色火山灰」は、現在、10世紀前葉頃に降下したものと考えられている（白鳥 1980、井上・山田 1990）。

11. 遺物図版にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下のとおりである。

土器類：1/3 金属製品：1/3 石器・石製品：1/3

12. 遺物実測図では、以下の場合にはスクリーン・トーンによって示した。

土師器黒色処理

13. 本書は調査担当者との協議の後に、角山遺跡の執筆・編集を田中政幸が行った。山居遺跡の執筆はⅢ、Ⅳ、Ⅴを豊村幸宏、Ⅰ、Ⅱを田中政幸が担当し、豊村が編集した。

14. 本遺跡の調査成果については、その内容の一部を公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本書がこれらに優先する。

15. 発掘調査の記録や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。

目 次

序 文

例 言

目 次

はじめに

角山遺跡

I 遺跡の位置.....	7
II 調査の方法と経過.....	7
III 発見された遺構と遺物.....	10
IV 考察.....	14
V まとめ.....	16

山居遺跡

I 遺跡の位置.....	23
II 調査に至る経過と方法.....	23
III 発見された遺構と遺物.....	25
IV 考察.....	58
V まとめ.....	66

I はじめに

仙台市から岩手県宮古市に至る自動車専用道路が、三陸縦貫道路として立案・計画され、そのうち「矢本石巻道路」については平成8年度から工事に着手する事業計画が決定された。この「矢本石巻道路」は、石巻河南インターチェンジを起点に旧北上川を渡り桃生インターチェンジ（仮称）にいたるものである。事業計画では、幅23.5mの4車線を整備するにあたり、地形の起伏に沿って大規模な切土や盛土を行うものであった。こうした経緯を受けて、宮城県教育委員会と国土交通省東北地方整備局は、予定路線内の周知の遺跡について保存協議を進め、遺跡への影響を避けるため一部区間についてはルートの変更をおこなった。また、分布調査を実施して新たな遺跡の有無を確認するとともに周知の遺跡については確認調査を行い、これらの結果に基づいて再協議を重ね、遺跡の保存と道路整備事業の調整を図ってきた。

以上のような保存協議の結果に基づいて、宮城県教育委員会は記録保存となった遺跡について発掘調査に順次着手した。平成12年度は桃生郡河北町（現石巻市）沢田山西遺跡・新田東遺跡の確認調査を実施し、平成13年度に両遺跡の事前調査を行った。平成14・15年度には崎山B遺跡・沢田山西遺跡・桃生郡桃生町（現石巻市）角山遺跡の事前調査を実施する一方、平成14年度に桃生城跡北東隅隣接地・万歳山C遺跡・太田窓跡・細谷B遺跡・八幡遺跡・山居遺跡の確認調査を始めた。その結果、遺構の発見された桃生城跡北東隅隣接地・万歳山C遺跡・細谷B遺跡・八幡遺跡及び太田窓跡北半部を対象に事前調査を平成15年度に実施した。また、平成16年度は未買収地のために調査ができなかつた角山遺跡北半部西区域の確認調査を行い、平成17年度（本年度）は角山遺跡・太田窓跡南半部・山居遺跡を対象に事前調査を実施している。

なお、本年度で「矢本石巻道路」建設関連の調査対象となる遺跡の事前調査はすべて終了するが、桃生インターチェンジ（仮称）以北の「桃生登米道路」建設に伴い実施した分布調査で新たに発見した登米市布目遺跡の確認調査も実施している。

第1表 三陸縦貫自動車道建設計画に伴う発掘調査

調査年度	遺跡名	所在地	調査面積 (m ²)	調査期間	報告書
2001（平成13）	沢田山西遺跡	河北町	2,080	4.09~4.20 10.01~10.13	宮城県教育委員会 2002
	新田東遺跡	河北町	8,500	4.23~12.10	宮城県教育委員会 2003
2002（平成14）	崎山遺跡	桃生町	2,900	4.08~6.17 10.15~12.10	宮城県教育委員会 2003
	崎山B遺跡	河北町	6,000	6.03~7.23	宮城県教育委員会 2004
2003（平成15）	沢田山西遺跡	河北町	1,000	6.03~10.22	宮城県教育委員会 2004
	万歳山C遺跡	桃生町	700	4.07~5.16	宮城県教育委員会 2004
2004（平成16）	桃生城跡	桃生町	1,500	4.30~6.06	宮城県教育委員会 2006
	沢田山西遺跡	河北町	1,200	5.18~7.18	宮城県教育委員会 2004
2005（平成17）	太田窓跡	桃生町	2,000	6.17~8.01	宮城県教育委員会 2005
	角山遺跡	桃生町	7,400	7.02~12.02	宮城県教育委員会 2005
	八幡遺跡	桃生町	2,540	7.17~8.07 9.01~10.08	宮城県教育委員会 2004
	細谷B遺跡	桃生町	900	11.12~12.11	宮城県教育委員会 2006
	角山遺跡	桃生町	95	8.02~8.03	宮城県教育委員会 2005
	角山遺跡	石巻市	1,400	4.23~5.19	（本報告書）
	太田窓跡	石巻市	2,900	5.09~6.13 10.12~11.30	（本報告書）
	山居遺跡	石巻市	1,500	6.07~10.20	（本報告書）

宮城県教育委員会

2002『沢田山西遺跡－三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅰ－』宮城県文化財調査報告書第189集

2003『新田東遺跡－三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅱ－』宮城県文化財調査報告書第191集

2004『沢田山西遺跡ほか－三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅲ－』宮城県文化財調査報告書第196集

2005『角山遺跡－三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅳ－』宮城県文化財調査報告書第200集

II 遺跡の地理的環境と周辺の遺跡

本書で報告する角山遺跡、山居遺跡が所在する宮城県石巻市桃生町（旧桃生郡桃生町）は北上川下流域に位置している。石巻市桃生町は北上川と旧北上川で囲まれた石巻平野に属する沖積地と北上山地南端にあたる丘陵地帯からなっている。この周辺の地形は比較的急峻な丘陵部と沖積層が厚く堆積した平野部が直に接しており、河岸段丘面がほとんど発達していない。傾斜地の多いこの地域では黒色土層や火山灰堆積層が発達せず、三疊紀やジュラ紀の基盤層の上に薄い腐植土層や基盤岩崩落土が堆積している。このため旧石器時代の遺物を包含する地層が発達せず、当該期の遺跡も認められない。

縄文時代の遺跡としては貝塚が多く分布しており、北上川沿いに早期の煙崎貝塚がある。1950年代に発掘調査が行われ、カキ、ハマグリ、ヤマトシジミなどを主体とする貝層、人骨などが発見されている。他に、早期の十所貝塚（15）、中期～晚期の深山貝塚（10）などがある。また丘陵地では山居遺跡（1）、細谷B遺跡（4）、晚期の細谷遺跡（30）などがみられる。

弥生時代の遺跡はほとんど知られていない。古墳時代についてもほぼ同様であるが、唯一、新田東遺跡（6）では前期の竪穴住居跡が一軒発見されている。また角山遺跡から西南約700mの地点には埴輪をもつ袖沢古墳群（9）がある。

これに対して、古代を主体とする遺跡は比較的多く分布する。角山遺跡の南方約2.8kmにある桃生城跡（3）は著名な城柵遺跡である。『続日本記』によれば桃生城は天平宝字2年（758）頃から造営が始まり、翌3年（759）秋頃には完成し、宝亀5年（774）7月には海道蝦夷の攻撃によって一部が破壊されたことなどが知られる。宮城県多賀城跡調査研究所が昭和49・50年度、平成6～13年度までに継続的に調査し、遺跡の概要が明らかになってきている（多賀城跡調査研究所1998・2002ほか）。

桃生町周辺の丘陵には山居遺跡の南に位置する水井館跡（14）や太田館跡（31）、安部館跡（26）、壇ノ森館跡（17）、沢山城跡（16）など中世の館跡が多く分布している。

これまで発掘調査された遺跡が少ない地域にあって、三陸自動車道建設に伴い宮城県教育委員会が平成12年度から実施してきた発掘調査により、この地域の様相が徐々に明らかになりつつある。桃生城の東隣には平成13年度に発掘調査が行われた新田東遺跡（6）がある。桃生城の存続期を中心とする大規模な集落跡で、桃生城の造営・維持に関わった人々の集落跡と考えられている。この他、古墳時代前期や平安時代の竪穴住居跡も検出されている（宮城県教委：2003）。

平成15年には角山遺跡の北方約1.5kmの八幡遺跡（7）で平安時代の竪穴時代居跡と古代の水田跡が検出された。また、角山遺跡の南方約1.7kmにある細谷B遺跡（4）では縄文時代中期末の遺物包含層や古代の竪穴住居跡などが発見されている。



第1図 遺跡の位置



遺跡名立地種別時代	遺跡名立地種別時代	遺跡名立地種別時代
1 山原遺跡 丘陵 台原・多葉葉 羽文・中・後・平安・中世	2 丹波山遺跡 丘陵 草場・水田 古代・後・平安	3 大河内遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 中世
4 角山遺跡 丘陵 草場・水田 古代・後・平安・中世	5 墓山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 中世	6 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 中世
6 桃生山遺跡 丘陵 石塚 平良・平安	7 黄泥山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 中世	8 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 中世
9 網谷口遺跡 沿河低地 散在地 羽文・中・後・平安	10 阿良山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 中世	11 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 中世
12 太田東遺跡 丘陵 石塚・土塁 平良・平安・中世	13 開谷山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 古代	14 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 中世
15 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 平良・平安・中世	16 開谷山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 古代	17 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 中世
18 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 平良・平安・中世	19 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 古代	20 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 中世
21 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 平良・平安・中世	22 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 古代	23 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 中世
24 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 平良・平安・中世	25 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 古代	26 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 中世
27 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 平良・平安・中世	28 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 古代	29 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 中世
30 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 平良・平安・中世	31 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 古代	32 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 中世
33 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 平良・平安・中世	34 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 古代	35 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 中世
36 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 平良・平安・中世	37 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 古代	38 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 中世
39 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 平良・平安・中世	40 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 古代	41 丹波山遺跡 丘陵 石塚・土塁・城郭 中世

第II図 遺跡の位置と周辺の遺跡

角山遺跡

目 次

I 遺跡の位置.....	7
II 調査の方法と経過.....	7
III 発見された遺構と遺物.....	10
IV 考 察.....	14
V ま と め.....	16

調 査 要 項

遺 跡 名：角山遺跡（かどやまいせき）（宮城県遺跡地名表登載番号70029）

遺跡記号：S L

所 在 地：宮城県石巻市桃生町太田字角山

調査要因：三陸縦貫自動車道矢本石巻道路建設

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査面積：確認調査 平成16年11月15日（月）～11月19日（金）

事前調査 平成17年4月25日（月）～5月9日（金）

調査対象面積：1500m²

調査面積：1400m²

調 査 員：確認調査 菊地逸夫 須田良平

事前調査 相原淳一 保原恒雄 田中政幸

I 遺跡の位置

角山遺跡は旧北上川沿いにある石巻市桃生町中心部から東へ約2.3km、町東部を流れる北上川によって分断された丘陵地帯から派生する小さな丘陵地に立地している。この丘陵は南西から北東方向に細長く伸びた標高25mほどの平坦地の少ない丘陵で、南東側や北西部からは小さな沢が入る（第1図）。

遺跡はこの小丘陵の南東斜面部から頂部を経た北部にかけての南北450m、東西250mほどの広がりをもっている。現況では畑地や水田として利用されている区域が多い。一方、遺跡の立地する丘陵周辺の低地には沖積地が広がり、遺跡の南東側にも狭い沖積地が丘陵に沿って北東へと伸びている。本遺跡周辺の沖積地には遺跡がほとんどみられないが、丘陵やその縁辺部には、古代の遺跡が中心に比較的多くの遺跡が点在している。

II 調査の経過と方法

工事計画と調査対象区：調査の対象となった道路路線敷は、角山遺跡が立地する狭長な小丘陵の中心部を北北西方向へ縦断している。

平成16年度までの調査経過：平成13年度に確認調査を実施し、平成14年度から本発掘調査を開始した。平成16年度に未買収地である北半部Ⅲ区西区域を除く約10,395m²の本発掘調査を終了し（第1～3次調査）、報告書を刊行した（宮城県教委2004）。

未買収地であった丘陵北側（Ⅲ区）の西区域（1,500m²）については、買収終了後の平成16年11月15日から19日に確認調査を行った。その結果、竪穴住居1軒などを発見したため、翌平成17年度に第4次の本発掘調査を実施することにした。本発掘調査は平成17年4月25日に着手し、5月9日にすべてを終了した。本報告は第4次調査について報告するものである。

調査区の概要：今回報告するⅢ区西区域は丘陵の頂上部から丘陵北側の北西斜面から北斜面かけての区域である。調査区内の比高差は8mある。遺構は西斜面の標高20～21mの地山面で竪穴住居跡1軒、北側斜面の標高19m付近の地山面で焼土遺構2基を検出した。

調査の方法：検出した遺構などの記録は、調査区内には遺構の密度が希薄だったため、SI1013竪穴住居跡とSX1014焼成遺構の周辺に日本測地系を基準とした杭を8本（E1～E8）設置し、それそれを結んだ線上に3m×3mのグリッドを設定した。調査区の位置はそのグリッドを基準に縮尺1/200で平板実測し、主要な遺構の記録については縮尺1/20の平面図、断面図を作成した。同時に500万画素のデジタルカメラ及び35mmと6×7のモノクロ・カラースライドフィルムで写真記録も行った。

基準点の国家座標は以下の通りである。

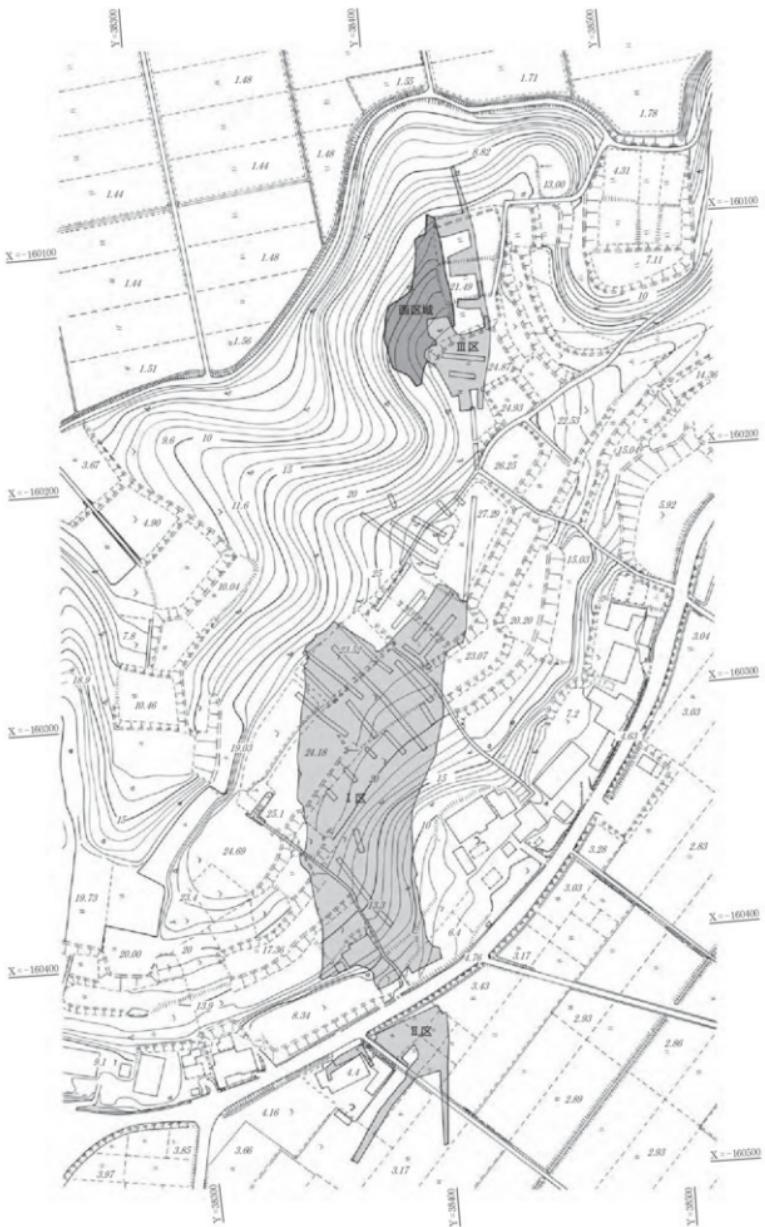
E1…X = -160,155.000 Y = 38,400.000 E2…X = -160,155.000 Y = 38,412.000

E3…X = -160,164.000 Y = 38,412.000 E4…X = -160,164.000 Y = 38,400.000

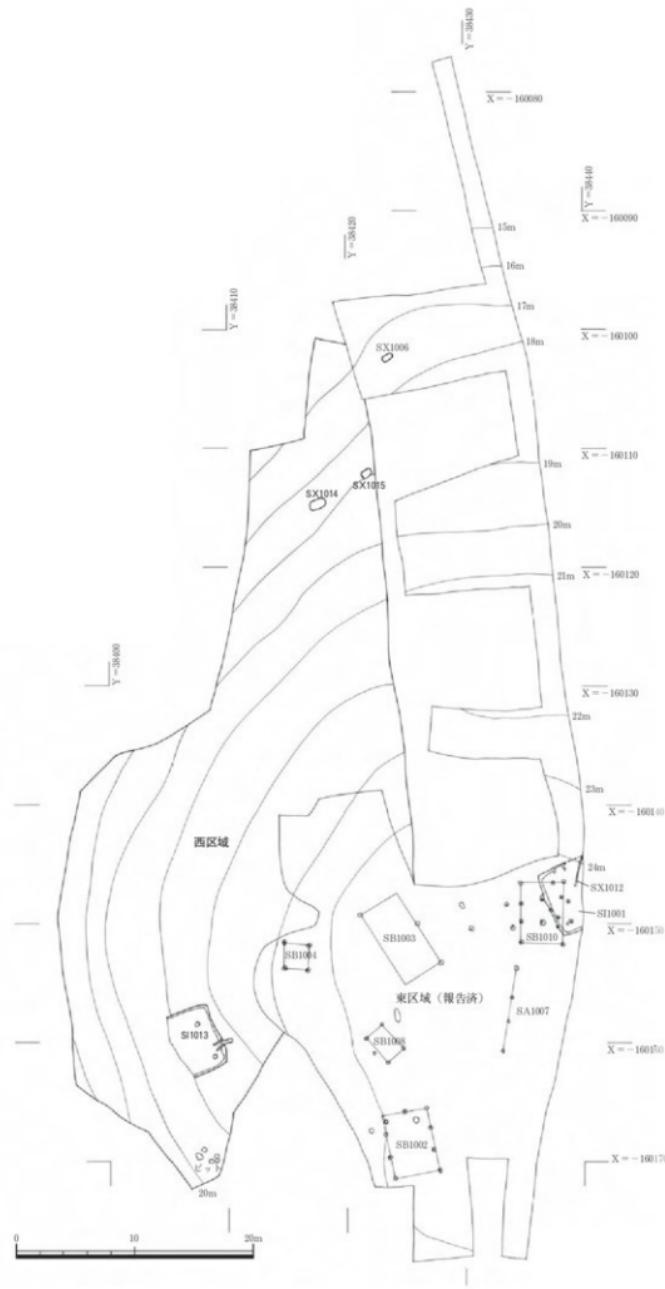
E5…X = -160,107.000 Y = 38,412.000 E6…X = -160,107.000 Y = 38,421.000

E7…X = -160,119.000 Y = 38,421.000 E8…X = -160,119.000 Y = 38,412.000

日本測地系国家座標表第X系X座標値



第1図 調査区の位置



第2図 III区遺構配図

III 発見された遺構と遺物

堅穴住居跡1軒、焼土遺構2基、ビット数個を地山面で検出した（第2図）。

1. 堅穴住居跡

【SI1013堅穴住居跡】（第3図・第4図・第5図）

〔概要〕調査区南東部、標高20～21mの緩やかな西斜面の地山面で検出した。住居西側は地形が斜面地のため、残存状況が悪く確認できなかった。

〔平面形と規模〕平面形は、西側が後世の削平のため残存していないが、隅丸方形状と推定される。規模は南北が東辺で約5.3m、東西が北辺で約3.5m残存している。

〔方向〕東辺で測るとN-23°-Eである。

〔壁〕東辺・北辺・南辺で残存している。やや斜めに立ち上がり、高さは残存状況のよい東辺中央部で約60cmある。

〔床面〕住居の東辺・北辺付近は地山を床としているが、住居中心部より西側の大部分と南辺付近は掘方埋土で埋め戻されており、その上面が床とされている。床は平坦でわずかに東辺側が高い。

〔主柱穴〕2個（P1・P2）検出し、ともに柱痕跡を確認した。柱間寸法は3.3mである。平面形は長辺約40cm、短辺約35cmの不整な方形である。深さは15～22cmである。P2は搅乱によって一部壊されている。掘方埋土は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。柱痕跡は径10cmの円形で、深さは14～22cmである。

〔周溝〕カマド付近を除く東辺と北辺・西辺で確認した。上幅10～20cm、深さ約10cmである。断面形はU字状を呈する。堆積土は地山ブロックを多く含むふい褐色シルトである。

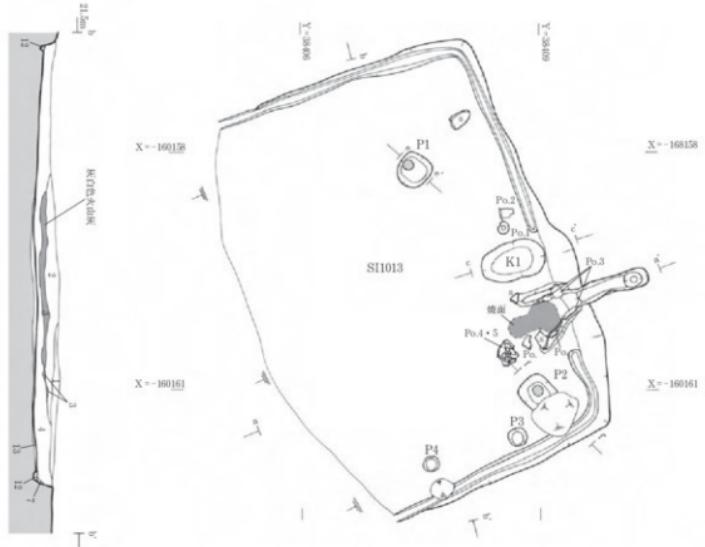
〔カマド〕東辺中央やや南側に付設されている。燃焼部と煙道が残存している。燃焼部は幅30～45cm、奥行60cmである。奥壁で高さ18cmほどの段がついて煙道に至る。燃焼部底面は平坦であるが、奥壁に近づくにつれてゆるやかに立ち上がる。燃焼部底面からカマド側壁内側に顯著な焼面が認められる。

カマド側壁は地山ブロックを含む暗褐色シルトで構築している。右側壁は長さ70cm、幅16cm、高さは20cm、左側壁は長さ63幅、幅16cm、高さ11cm残存している。煙道は長さ90cm、幅20cm、深さ20cmほどで、底面は水平ではなく煙道先端側が高い。先端には径25cm、深さ28cmの煙出しビットが取り付く。

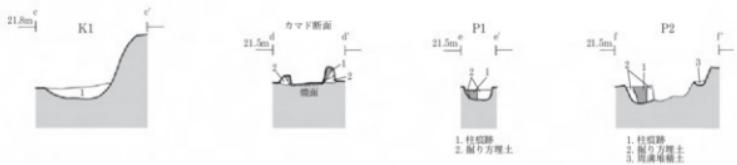
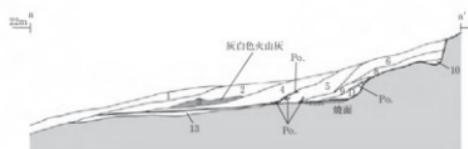
〔貯蔵穴〕貯蔵穴（K1）はカマドの左側で検出した。平面形は長径80cm、短径50cmの不整梢円形で、深さは約15cmである。断面形は皿状を呈する。堆積土は焼土・地山粒を多く含む黄褐色シルトで自然堆積である。堆積土から非ロクロ土師器甕の破片が出土している。

〔その他のビット〕住居内の南辺付近で2個の小さいビット（P3・P4）を検出した。平面形は直径10～12cmの円形である。住居に伴う可能性もあるが、どのような性格のものか不明である。

〔堆積土〕11層に分かれる。3層が灰白色火山灰である。4・5・6・7層が住居廃絶後の自然堆積土であり、8層が煙道の崩落土、9層がカマドの崩落土である。10・11層がカマド機能時の自然堆積層とみられる。



土器・壁を除いた状態



SI1013			
	土 色	土 性	備 考
1 黒褐色(10YR4/0)	シルト	地山粒を多く含む。自然堆積土。	
2 黑褐色(10YR2/0)	シルト	地山粒を多く含む。自然堆積土。	
3		灰白色火成灰	
4 黑褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロックを多く含む。自然堆積土。	
5 黑褐色(10YR5/0)	シルト	地山ブロックを多く含む。自然堆積土。	
6 明褐色(10YR2/4)	シルト	地山粒・火山灰・地山粒を多く含む。自然堆積土。	
7 黑褐色(10YR4/6)	シルト	地山粒・火山灰・地山粒を多く含む。自然堆積土。	
8 明褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒・火山灰・地山粒を多く含む。自然堆積土。	
9 云木褐色(10YR3/0)	粘質シルト	地山・灰成物・地山粒を多く含む。カド原流土。	
10 黑褐色(10YR4/0)	シルト	地山ブロックを多く含む。カド原流土の堆積。	
11 云木褐色(10YR3/0)	シルト	地山ブロックを多く含む。カマド堆積の堆積。	
12 黑褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロックを多く含む。自然堆積土。	
13 黑褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック・地山粒を含む。住居掘り方堆土。	

K1			
	土 色	土 性	備 考
1 云木褐色(10YR3/0)	シルト	地山粒を多く含む。自然堆積土。	

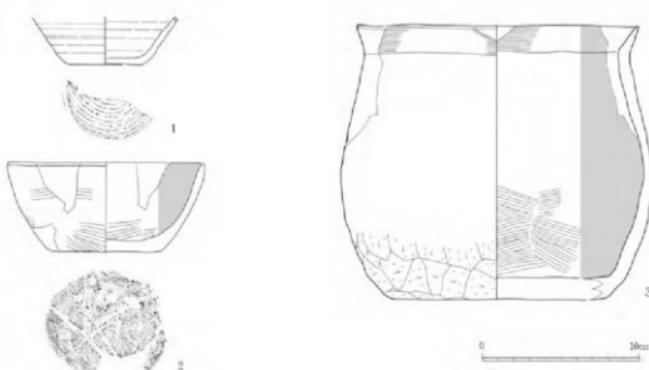
カマド断面			
	土 色	土 性	備 考
1 黒褐色(10YR2/4)	シルト	地山粒を多く含む。カマド堆積土。	
2 黑褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロックを多く含む。カマド堆積土。	

第3図 SI1013竪穴住跡



番号	器種	断面	口径	底径	高さ	残存率	特徴	写真図版	登録
1	土器器・环	米面	33.0	6.2	3.8	ほぼ完形	外側：口縁 ロコナデ、体部-底部 ハラケズリ、内面 ヘラタケ-黒色処理 Po.1	3-1	SI0011
2	土器器・壺	米面	33.4	—	2.5	外側：口縁 ロコナデ、側面 ハラケズリ、内面 壁減のため不明 Po.2	3-2	SI0012	
3	土器器・壺	カマ下底面	25.6	—	3.5	外側：口縁 ロコナデ、側面 ハケ目、内面 口縁ロコナデ、側面 ハラナデ Po.3	3-3	SI0013	
4	土器器・壺	米面	30.2	8.8	34.5	ほぼ完形	外側：上半部 手行タケ-ロコナデ、下半 ハラケズリ-手行タケ、内面 ロコナデ Po.4	3-4	SI0014
5	土器器・壺	米面	29.6	5.6	33.5	4/5	9.6: 口縁 ロコナデ、側面 上半 鮫目 下半 ハラケズリ、内面 口縁 ロコナデ、側面 ハラナデ Po.5	3-5	SI0015

第4図 SI1013竪穴住居跡出土土器1



回	器種	側面	口径	底径	高さ	残存率	特徴		写真図版	登録
							外側	内側		
1	泡毛器・杯	床面直上	—	—	5.91	2/5	内外面ロクロナデ	底部 刮削角切り無調整	4-1	SB007
2	土師器・甕	床面直上	18.2	8.0	5.8	2/5	外側：ヘラヒガキ 内面：ヘラヒガキ→黒色処理	底部 木柵板	4-2	SB004
3	土師器・甕	カマド内面直上	18.2	13.8	17.4	1/5	外 口縁 ヨコナデ	脚部下端 ヘラヒガキ 内 ヘラヒガキ→黒色処理	4-3	SB004

第5図 SI013竪穴住居跡出土土器2

〔出土遺物〕住居床面から非ロクロ調整の土師器壺（第4図-1）・甕（第4図-2・4）、ロクロ調整の甕（第4図-5）、カマド底面から非ロクロ調整の土師器甕（第4図-3）1点が出土している。ほかに床面直上層・堆積土から非ロクロ調整の土師器甕・壺（第5図-2・3）、須恵器甕・壺（第5図-1）などが出土している。

2. 焼土構

【SX1014焼成遺構】（第6図）

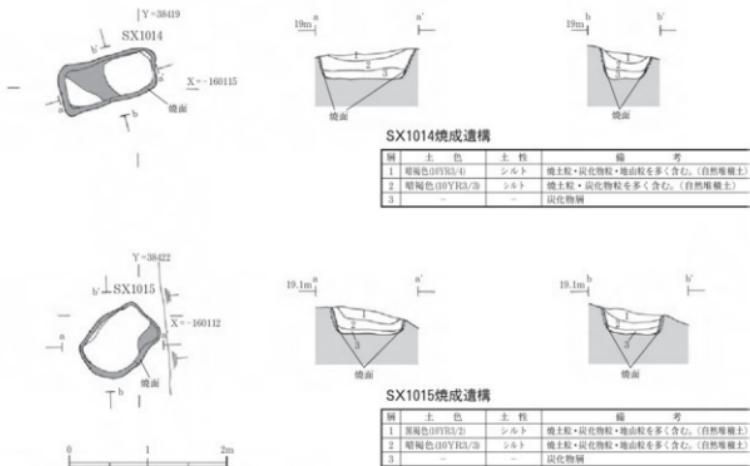
調査区北側の北斜面に位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長辺122cm、短辺63cm、深さは38cmである。断面形は逆台形を呈する。側壁の全周が焼けて赤変・硬化している。底面はほぼ平坦で一部で焼面が認められた。堆積土は3層認められ、1・2層は自然堆積土、3層は炭層で10cmほどの厚さがある。遺物は出土していない。

【SX1015焼成遺構】（第6図）

調査区北側の北斜面で位置する。平面形は隅丸方形で、規模は長辺88cm、短辺76cm、深さは34cmである。断面形は逆台形を呈する。側壁の全周が焼けて赤変・硬化している。底面はほぼ平坦で一部で焼面が認められた。堆積土は3層認められ、1・2層は自然堆積土であり、3層は炭層で10cmほどの厚さがある。遺物は出土していない。

3. ピット

調査区南東隅でピットを5基検出した。平面形は円形を呈し、径20~40cmのものと不整梢円形を呈し、長径40~60cm、短径20~40cmのものがある。いずれも深さ10~15cmの浅いピットである。



第6図 SX1014・SX1015焼成造構

そのうち円形のピットの1つから土師器甕の破片が出土している。

IV 考 察

SII1013竪穴住居跡とSX1014・1015焼成造構について若干の考察を行う。

1 SII1013竪穴住居跡出土土器と造構の年代

SII1013竪穴住居跡出土土器については次のようになる。

住居跡に伴うものとしては、床面・カマド底面から出土した非ロクロ調整の土師器環と甕（第4図-1・2・3・4）、ロクロ調整の土師器甕（第4図-5）がある。

床面から出土した土師器の环は、平底で内湾しながら立ち上がりそのまま口縁部にいたるもので、外面部に段や棱をもたない。外面の口縁部をヨコナデ、体部から底部をヘラケズリ、内面をヘラミガキの後に黒色処理したものである。

床面・カマド底面から出土した非ロクロ調整の土師器甕は、長胴形を呈し、胴部の張りが弱く、円筒形に近いものである。頸部と胴部の境に段のつくものとつかないものがあり、頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部が外反している。器面調整は外面の口縁部をヨコナデ、胴部を全面的にヘラケズリしたもの（第4図-2）、胴部上半はハケメ、下半にヘラケズリを施すもの（第4図-4）がある。内面は口縁部がヨコナデ、胴部がヘラナデを施している。

床面から出土したロクロ調整の土師器甕（第4図-5）は長胴形を呈し、頸部で外反し、口縁端部で上方に垂直に立ち上がる。器面調整は胴部上半がタタキの後にロクロで整形されている。胴部下半

はヘラケズリを施され、その後、下半端部には整形のためのタタキが施されている。また、外面下半部は火を強く受けたため、表面が剥落している。

以上のように、この住居出土土器は非ロクロ調整の环・甕とロクロ調整の甕が併存している。このように非ロクロ調整とロクロ調整の土師器が併存する類例としては糠塚遺跡第1号住居（宮城県教委1978）、伊治城跡第173号住居出土土器（築館町教委1992）、佐内屋敷遺跡第18号住居出土土器（宮城県教委1983）がある。

このなかでもSI1013住居出土の土師器环・甕の特徴と最も類似する例としては伊治城跡第173号住居出土土器があげられる。この住居から出土した土師器环はロクロ調整の环が多いが、非ロクロ調整の环としては、平底で内湾しながら口縁に向かって立ち上がるものがある。また、非ロクロ調整の土師器甕とタタキ目の残るロクロ調整の土師器甕が共存して出土している。

このようなことから、伊治城跡第173号住居出土土器と本住居出土土器の年代はほぼ同じ時期とみられる。したがって伊治城跡第173号住居出土土器の年代は8世紀末から9世紀初めと位置づけられていることから、SI1013竪穴住居跡の年代は8世紀末から9世紀初め頃と考えられる。

ところで、ロクロ調整の土師器甕（第4図-5）であるが、伊治城第173号住居のものと胴部下半の形態と製作技法に違いが認められる。それは本住居床面出土のロクロ調整の土師器甕がヘラケズリの後にタタキによって丸底風に整形されていることである。このような特徴を持つ長胴甕は宮城県内では最近まで発見例がなかった。本遺跡以外では、平成16年度に宮城県教育委員会で発掘を実施した栗原市原田遺跡のSI31竪穴住居跡（次年度報告予定）と本書に掲載している山居遺跡SI105竪穴住居跡から1点ずつ出土しているだけである。このような特徴を持つ土師器の甕の存在は福島県の会津地方で知られており、そこでは日本海側の越からの影響に注目しているようである（山中2004）。今回、このような土師器甕が本遺跡から出土したことは本地域と会津地方との関係の一端を示す遺物として注目される。

2 焼成遺構

SX1014・1015焼土遺構からは遺物が出土していないため時期は不明である。しかし、以前報告されているⅢ区東区域で検出したSX1006焼成遺構（宮城県教委2005）と同様に北斜面に立地しており、平面形が隅丸方形状であり、断面も箱形であること、堆積土の最下層に炭の堆積が認められる点など酷似していることから、同じ性格をもって利用された遺構と考えられる。SX1006焼成遺構の時期は堆積土の上層に灰白色火山灰が認められることから古代の遺構としている。SX1014・1015焼成遺構には灰白色火山灰の堆積は確認できなかったが、遺構の形状や立地をからみて古代の遺構の可能性がある。

VI ま　と　め

- 1 今回の調査では堅穴住居跡1軒、焼成遺構2基、小ピットを検出した。
- 2 堅穴住居跡の年代は出土遺物から8世紀末から9世紀初めころと考えられる。
- 3 SI1013堅穴住居跡出土で外面胴部下端にヘラケズリ調整の後に、タタキ調整を施すクロ調整の土師器の甕は本地域と会津地方との関連を示す注目されるものである。
- 4 2基の焼成遺構は第2次調査で発見された焼成遺構SX1006と同じ性格を持つ遺構と考えられ、古代に使用された可能性がある。

【引用参考文献】

- 氏家和典 (1957) 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14号 東北史学会
- 加藤道男 (1989) 「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』
- 加藤道男 (1993) 「宮城県の土器様相」「北日本における律令期の土器様相」第18回古代城柵官衙検討会
- 白鳥良一 (1980) 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VI』宮城県多賀城跡調査研究所
- 築館町教育委員会 (1992) 『伊治城跡IV』築館町教育委員会文化財調査報告書第4集
- 宮城県教育委員会 (1978) 「難保遺跡」宮城県文化財免振査略報〔昭和52年度分〕宮城県文化財調査報告書第51集
- 宮城県教育委員会 (1981) 「上新田遺跡」「長者原貝塚・上新田遺跡」宮城県教育委員会文化財調査報告書第78集
- 宮城県教育委員会 (1982) 「御駒堂遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書VI」宮城県教育委員会文化財調査報告書第83集
- 宮城県教育委員会 (1983) 「佐内尾張遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書VII」宮城県教育委員会文化財調査報告書第93集
- 宮城県教育委員会 (2003) 「新田東遺跡」宮城県文化財調査報告書第189集
- 宮城県教育委員会 (2004) 「沢山山西遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第196集
- 宮城県教育委員会 (2005) 「角山遺跡」宮城県文化財調査報告書第200集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 (1998) 「桃生城跡VI」多賀城関連免振査調査報告書第23冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 (2002) 「桃生城跡X」多賀城関連免振査調査報告書第27冊
- 山中雄志 (2004) 「古代の越と会津」「越後佐渡の古代ロマン」新潟県歴史博物館

1. 調査区遠景（西から）



2. SI1013竪穴住居跡全景
(西から)



3. SI1013カマド棟出状況
(西から)



1. 調査区北側（南から）



2. SX1014焼成遺構（北から）



3. SX1015焼成遺構（北から）



図版 2



1：土師器環 2～5：土師器甕（縮尺=1/3）

図版3 SI1013竪穴住居跡出土遺物1



1：須恵器環
2：土師器环
3：土師器甕
4：須恵器甕
(縮尺=1/3)

図版4 SI1013竪穴住居跡出土遺物2